巻頭言

次世代の大学図書館をめざして

大学図書館の役割は、まずは学生の皆さんにひろく図書を利用してもらい学習、研究に役立ててもらうとともに、大学に所属する先生方の研究･教育に資することにあります。さらに、貴重な書物を保存していくことも使命です。このたび、J.C.C. ニュートン先生が創設された関西学院大学の伝統ある図書館の館長となったことに誇りとともに、大変な責任の重さを感じています。

大学図書館の意味は伝統的に上記のことがあるとともに、時代に応じて変容してきました。とくに、近年は、世界的な情報化の流れにともなって、図書館も電子化が進んでいます。関西学院大学図書館では、多数の洋雑誌のオンラインジャーナルへの転換、また教員の論文リポジトリとして、学術成果を蓄積し、世界に発信していく役割を担うようになりました。

これらの変化は、これまでの活字と紙のメディアが電子媒体に移行しただけで、コンテンツ自体は変わらないようにも思えます。が、カナダのメディア論者、M. マクルーハンが「メディアはメッセージ」と述べているように、媒体の変化が人間の表現や記憶に大きな影響をあたえていることも事実です。15 世紀に今日の出版の基礎をつくったグーテンベルクの活版印刷術の発明が、「42 行聖書」を印刷することで結果的に宗教改革にまで繋がったように、今日のグローバルな電子化によって人類史的な変革が起こっているのかもしれません。

こうした世界的な変化の中で、日本でも国会図書館が電子化の流れを大胆に取り入れ、またグーグルをはじめとする国際企業が世界の研究機関に知的情報のインターネットによる公開を求めてきています。だが、このような変化にそのまま大学図書館が従っていって良いとは限りません。

たとえば、この変化にともなう「著作権制度」の揺らぎのなかで、他の著作物と学術成果の違いを検討しなければなりません。また、わが国の出版文化は西欧に決して遅れていたわけではなく、近世から、とくに上方では「浮世草子」「黄表紙」をはじめとする印刷文化の大衆的創出と普及がなされてきました。このような世界の文化の多様性と伝統を守りつつ、それをいかす形で、関西学院大学の学術発信の拠点として、大学図書館はあり続けたいと思っています。

また、同時に大学図書館は、学生の皆さんに楽しく利用してもらえるスペースでもあり、学生が読みたい本や接したい情報が用意されていることにも心を開いておかねばなりません。しかし、大学図書館の役割は、都市にある公共図書館と異なります。大学は、文化、芸術、科学の振興に大いなる責任をおっています。なかでも大学図書館は、キャンパスでの位置が象徴しているように、その学術的中心として揺るぎのない立場を保ちつつ、発展していかなければなりません。この伝統と変化の共存をいかに図るか、今後も大学図書館では考え、変革していきます。

大学図書館長　奥野　卓司